

2006年度
文部科学省 「特色ある大学教育支援プログラム」選定
「アジア理解教育の総合的取組」



アジア言語スピーチコンテスト



ASIA MIX ガムラン演奏



ASIA MIX ベリーダンス



アジア言語スピーチコンテスト

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 「特色ある大学教育支援プログラム」とは | 1 |
| 選定理由 | 1 |
| 国際関係学部の概要と教育目標 | 2 |
| I. アジア理解教育の総合的取組(概要) | 3 |
| II. 取組の実施プロセス | 4 |
| 1. 本取組の背景と目的 | 4 |
| 2. アジア理解教育の総合的取組の4つの柱 | 5 |
| (1) アジア地域言語教育 | 5 |
| (2) 地域研究カリキュラム | 7 |
| (3) 現地体験型学習 | 11 |
| (4) 学生による企画・参加・実行型の活動 | 15 |
| III. 取組の組織性 | 18 |
| IV. 取組の有効性 | 18 |
| V. 今後の実施計画 | 20 |

「特色ある大学教育支援プログラム」とは・・・

このプログラムは、文部科学省が実施するもので、さまざまな分野で教育を行なっている全国の大学から、特色ある優れた実践例を選定し、財政支援を行なうとともに、その事例を広く社会に情報提供することで、大学教育の改善をはかろうという趣旨で始められました。2006年度は、全国の大学・短期大学から331件の取組が申請を行ない、本学部の「アジア理解教育の総合的取組」を含めて、48件が採択になりました。(採択率14.5%)



ASIA MIX アジア料理祭



アジア言語スピーチコンテスト実行委員会



ASIA MIX ジャワ仮面舞踊

選定理由

《本取組は、1986年から開始されているだけに体系的でよく練られたアジア重視型プログラムであるという印象を与えます。大学の建学の精神が教育プログラムのなかに具体化されていることも評価されます。また、アジア地域言語教育、地域研究カリキュラム、現地体験型学習、学生による企画・参加・実行型の活動という4つの活動が結びつき、アジア理解に焦点を絞った「総合的取組」と表現するにふさわしい内容を持っています。》

「特色ある大学教育支援プログラム」実施委員会の審査結果から

国際関係学部(1986年設置)の概要

国際関係学科・国際文化学科の2学科

各学科定員100名・専任教員定数40名(9割近くがアジア研究者)

教育目標

中国・朝鮮半島から中東・地中海世界に広がる世界を対象として、言語の習得を基礎に、それぞれの地域に根ざしたアジア理解教育を推し進め、アジアへの豊かな想像力と理解力をもって日本とアジアの人びとの相互理解と友好の促進に貢献しうる人材を育成する。



板橋キャンパス



東松山キャンパス



I. アジア理解教育の総合的取組(概要)

国際関係学部が推進する「アジア理解教育の総合的取組」は、①アジア地域言語教育、②地域研究カリキュラム、③現地体験型学習、④学生による企画・参加・実行型の活動、の4つの柱を有機的に組み合わせ、アジア理解の基礎を築くことを目的とする。

- ①「アジア地域言語教育」: アジアの人びとの心に直接届くコミュニケーションの道具として、中国語からアラビア語までのアジア言語の習得をはかる。
- ②「地域研究カリキュラム」: アジアを中国・韓国の東アジア、インドネシア・ベトナム・タイを中心とする東南アジア、インド・パキスタンの南アジア、イラン・アラブ諸国を中心とする西アジアの4地域に分け、それぞれの地域性と多様性をふまえたカリキュラムにより、各地域の政治・経済・社会、また、歴史・文化・芸術について研究を行なう。
- ③「現地体験型学習」: 中国の上海師範大学、タイのチュラーロンコーン大学、エジプトのアレキサンドリア大学など、アジア各国の海外協定校への現地研修と留学による体験学習を通じて、アジア理解を深める。
- ④「学生による企画・参加・実行型の活動」: アジア言語スピーチコンテスト、料理祭を中心とするASIA MIX、研究班の発表を中心とするASIA WEEK等、学生の自主的活動により、アジアへの主体的関わりを深めることをねらいとする。

この4つは、1986年の学部創設以来、アジアを重視する本学部の教育の柱としてきたものです。

II. 取組の実施プロセス

1. 本取組の背景と目的

本学部は、いわゆる「研究者養成」型の学部ではなく、「教養学部」型の性格を有している。また、学生は必ずしもアジア地域への明確な目的意識を持って入学してくるわけではない。本取組は、このような本学部の性格をふまえ、学生の現況に対応するために進めてきたプログラムである。すなわち、アジアに漠然たる関心は抱いているものの、その社会や歴史、文化等に対する認識を欠き、アジアに関するさまざまな言説への批判的な判断力を持たない学生に、勉学と課外活動の両面からガイダンスと知的刺激を与え、アジア理解の基礎を築くこと、それが本取組の背景と目的である。



ASIA MIX ベリーダンス



ASIA MIX ガムラン演奏



現地研修：インドネシア 2004

取組と大学の理念との関連性

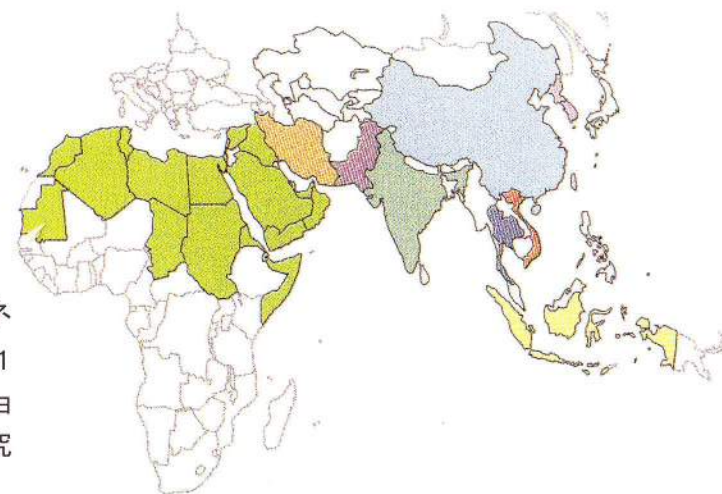
「東西文化の融合」を建学の精神に掲げる本学において、国際関係学部はアジアに重点を置いた教育を行ない、アジアへの豊かな想像力と理解力をもって、日本とアジアの人びとの相互理解と友好の促進に貢献できる人材の育成をはかってきた。「アジア理解教育の総合的取組」は、こうした建学の精神と学部創設の理念を具体化させて実施しているものである。

2. アジア理解教育の総合的取組の4つの柱

(1) アジア地域言語教育

制度と目的

本学部では、アジア理解の大きな柱として、中国語、コリア語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語、アラビア語の9言語から1言語を選択必修としている。アジア言語を学ぶことにより、直接的なコミュニケーションの道具を手に入れ、その地域に暮らす人びとへの共感を育む契機とし、地域研究の基盤をつくることがねらいである。



■ 中国語 ■ コリア語 ■ インドネシア語
■ タイ語 ■ ベトナム語 ■ ヒンディー語等
■ ウルドゥー語 ■ ペルシア語 ■ アラビア語

実施状況と達成目標



現地研修：パキスタン 2003

地域言語教育は初級・中級コースと上級コースに分かれ、国際関係学科と国際文化学科に共通のものである。1年次と2年次に履修する初級・中級コースは、ネイティブスピーカーを含む3人の教員で分担し、各学年とも週3コマ(6時間)の授業が組まれている。

上級コースは、3年次以上を対象に週2コマ(4時間)開講される。初級・中級では、基本的な文法事項と1,500語程度の語彙を習得し、2年次に行なわれる現地研修でコミュニケーションをはかることのできる語学力の獲得をめざす。上級では、アジア言語の総合的な運用能力を獲得し、言語を地域研究に結びつけ、卒業論文の執筆にあたって、現地語資料を活用できるようにすることが目標である。

地域言語担当の教員は、語学科目だけでなく、2年次生から始まる少人数制の演習(定員10名程度)と地域研究科目も担当し、アジア言語を基礎とした地域研究を指導している。また、言語担当以外の教員もそれぞれ専攻する地域の言語に精通しており、演習において現地語資料の講読などの指導を行っている。

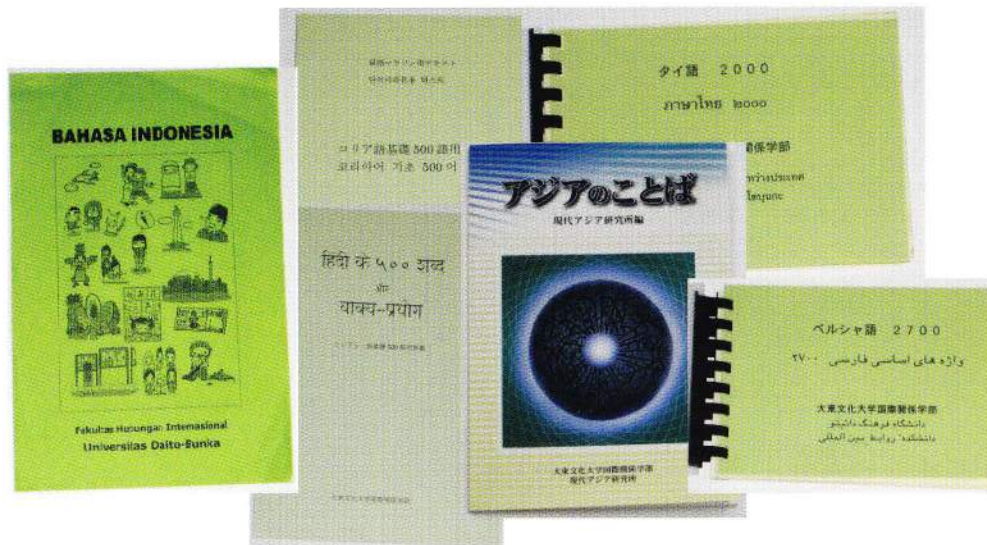
課題と対策

地域言語教育の課題は、いかに学生の自発的な学習欲を引き出し、臨場感あふれる授業を行なうかということ。以下はそのための対策である。

テキストと単語集の開発: アジアへの興味を育み、学習意欲を刺激しつつ到達レベルを段階的に引き上げるために、アジアの歴史・社会・文化・生活に関する情報を盛り込んだ独自の教材を協定校教員の協力を得て作成し、これを基礎に学生の学力に見合った学習法を開発している。

新聞とインターネットの活用: アジアの最新の動向に対する学生の関心を高め、言語教育と地域研究を結びつけるために、学部付設の現代アジア研究所が定期購読する現地語新聞を活用し、また、コンピュータ教室においてインターネット上の現地語ニュースの検索を指導するなどしている。

現地研修とアジア言語スピーチコンテスト: 教室内での通常授業に加えて、言語習得への学生の主体的な関わりを刺激し、学習の到達度をはかるために実施しているものである。



2006年度「インターネットを使ったインドネシア語の授業」

本日(6/16)の2時間目の「インドネシア語2」の授業は次の手順で進めます。渋滞しているページは避け、時間内にできるだけ多くのページにアクセスしてください。不明な点、立ち往生した場合はすぐに佐々木を呼んでください。提出用紙に書き込みをしながら、先に進んでください。この手順は、掲示板 acar campur にも載せています。

- Yahoo Japan または Google で「インドネシア語 佐々木信子」で検索
- 【1】「単語テスト」を受験する。
- 「三択テスト(初級 No.1)」(10番目の minggu まで)。何問正解だったか?
- 「三択コンテスト」は、先ず「成績」を見て、「挑戦する」へ。
- 【2】皆さんが使っている、「最新インドネシア語小辞典」の編者のHP Sanggar Bahasa 'ndonesia へ行き、次のチェックポイントを回る。
<http://homepage3.nifty.com/sanggar/newpage1.htm>
- 注意:【4】~【14】は、すべて Sanggar Bahasa Indonsia の表紙からアクセス
- 【3】「テストいろいろ」を受験する。
- 語彙力チェック b-1
- 正誤問題、○はいくつ?
- 【4】Gallery of Indonesian Songs で、歌を聞く
Children Songs → Dakocan(1960年に日本で大流行したビニール製の人形)
NATIONAL Songs → 10.Indonesia Raya(国歌)
- 【5】「中庭 94-03 04-」で、興味のある項目を読む □
- 【6】Radio Jepang へ行き、
□ Programa Mingguan で金曜日の放送を聞く
□ Programs の Belajar Bahasa Jepang でインドネシア語を聴く。
今日は第何課で、そのタイトルは?
- 【7】Google で検索
□ スシロ・パンパン・ユドヨノ Susilo Bambang Yudhoyono という人は、どんな人か調べる。性別、年齢、職業は? □ インドネシア料理の画像をどこかで見つけ、その料理名を書く。

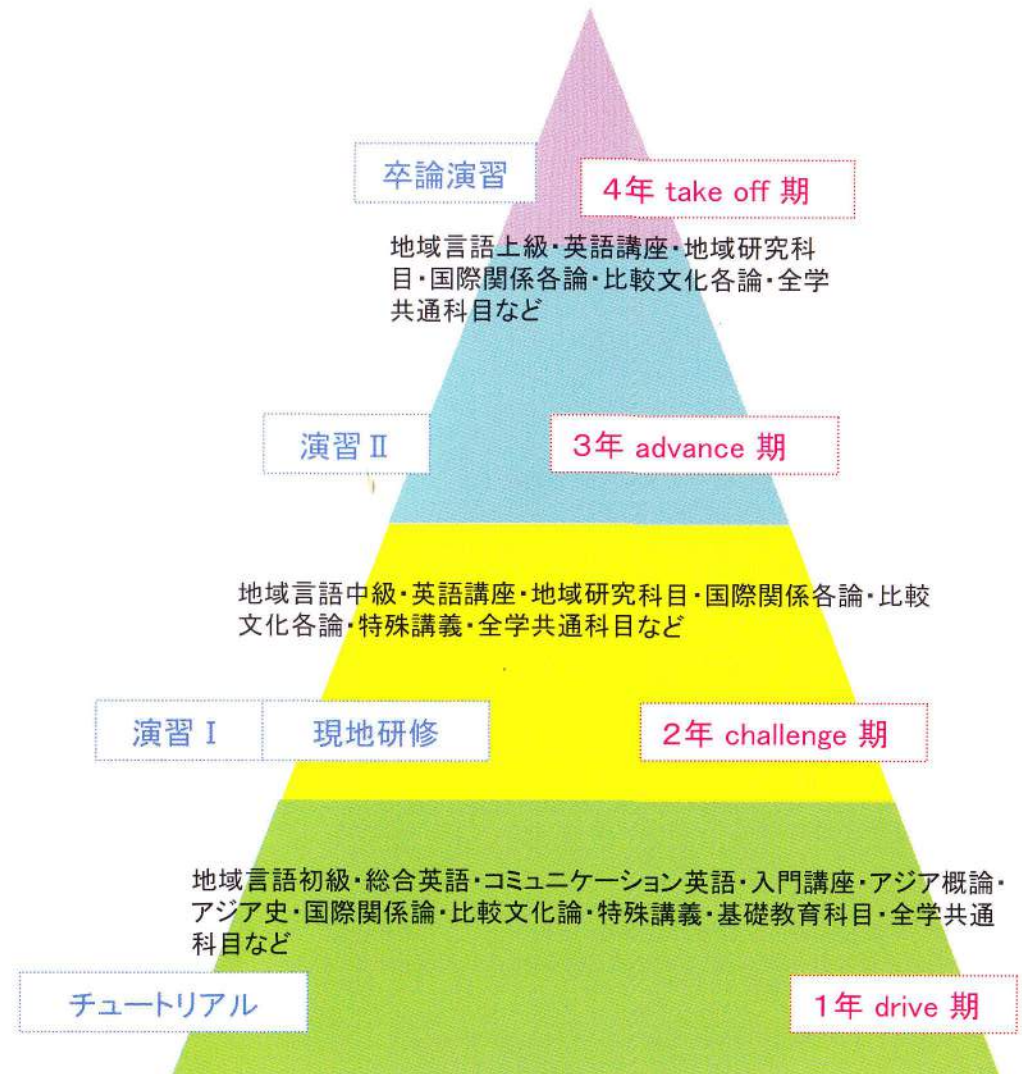
(2) 地域研究カリキュラム

制度と目的

アジアを「東アジア」(対応する言語は中国語、韓国語)、「東南アジア」(インドネシア語、ベトナム語、タイ語)、「南アジア」(ヒンディー語、ウルドゥー語)、「西アジア」(ペルシア語、アラビア語)の4地域に分け、それぞれの地域に対応して、国際関係学科は政治・経済・社会を、国際文化学科は歴史・文化・芸術を中心にカリキュラムが編成されている。アジアへの具体的な関心を喚起し、地域に根ざした研究を通じて、実感と共感を伴ったアジア理解を進めることをめざす。

実施状況と達成目標

学生は履修する言語に即して専攻地域を選び、原則的にそれぞれの地域に即して地域研究科目を履修する。「動機づけ」「アジアに触れる」「アジアを理解する」「地域研究のまとめ」と、4学年に応じたintensiveで段階的なコースを設定し、各学年における少人数制の演習で到達度をはかり、卒業論文の作成に結びつける。



カリキュラムの概念図

科目例

入門講座(1年次選択必修科目)

本講座は、アジアに漠然たる関心しか持たない学生に、「動機づけ」「学びへの励まし」を与える導入教育の性格を持つ。いわゆる「概論」ではなく、アジアのさまざまなトピックを素材に、「学ぶことの面白さ」「問題の所在」をともに考える。両学科とも「社会科学入門」(政治・法律・経済・社会)と「人文科学入門」(歴史・生活文化・文学・芸術)から、所定の単位の修得を義務づける。

地域研究科目(2年次以上選択必修科目)

地域研究の中核をなす科目群で、学生はここでアジアの具体的な姿に触れ、理解を深めていく。東南アジア地域を例にとれば、「東南アジアの政治と国際関係」「グローバル化の中の東南アジア経済」「ヒトとモノから見た東南アジア社会」「東南アジア近現代史」「東南アジアの生活と文化」「東南アジアの芸能」といった科目群である。

国際関各論・比較文化各論(自由選択科目)

「イスラム文化論」「比較文化史」「国際政治学」「開発経済学」「国際機構論」「国際法」「国際経済論」「難民研究」「民族問題」「伝統社会論」など、地域共通の分野について学ぶ。

特殊講義(自由選択科目)

固定したカリキュラムの枠にとらわれず、さまざまなテーマに柔軟に対応するための講座で、「アジアの身体とパフォーマンス」「ガムラン合奏」「NGO活動論」等、ワークショップ形式で進められるのが特徴である。学生がアジア独特のリズムに合わせて身体を動かし、また伝統楽器の演奏法を学ぶなどして、アジアへの興味と理解を深めることがねらい。



特殊講義「アジアの身体とパフォーマンス」授業風景

東南アジア地域研究を例にした現行カリキュラム

必修科目

選択必修科目

自由選択科目

| 教育段階 | 1年 drive 期 | 2年 challenge 期 | 3年 advance 期 | 4年 take off 期 | |
|----------|------------------|--------------------------------|---|---------------------|--------|
| 目標 | 動機づけ | アジアに触れる | アジアを理解する | 地域研究のまとめ | |
| 主要カリキュラム | 地域言語 | 初級ベトナム語、 インドネシア語、タイ語 | 中級ベトナム語、 インドネシア語、タイ語 | 上級ベトナム語、インドネシア語、タイ語 | |
| | 英語 | 総合英語、 コミュニケーション英語 | 英語講座 1～12（英語で読むアジア、英語で書くアジア、アジアの平和と安全保障、Speaking Skills、English for International Business、他） | | |
| | 演習 | チュートリアル | 演習 I | 演習 II | 卒業論文演習 |
| | 入門講座 | 社会科学入門 1～4 人文科学入門 1～4 | | | |
| | 基礎教育科目 専門教育科目 | アジア概論、アジア史 | 東南アジアの政治と国際関係、グローバル化の中の東南アジア経済、ヒトとモノから見た東南アジア社会、東南アジア近現代史、東南アジアの生活と文化、東南アジアの芸能 | | |
| | | 国際関係論 比較文化論 | | | |
| | | 人文地理学、イスラム文化論、アジア人口論、比較文化史、その他 | 国際政治学、国際機構論、国際法、開発経済学、国際経済論、東洋史概論、日本と朝鮮半島の近現代史、難民研究、民族問題、アジア文学論、アジア社会論、中国伝統社会論、比較芸術学、NGO活動論、アジアの身体とパフォーマンス、ガムラン合奏、その他 | | |
| | | 現地研修 | | | |
| | 総合体育（全学共通） | | | | |

課題と対策

地域研究の教育効果を高めるにあたって直面してきた課題は、**学生のアジアへの具体的な関心をいかに喚起するか**、また、**地域研究をアジア言語教育といかに有機的に結びつけるか**、ということである。前者については、「入門講座」「特殊講義」および1年次に配当した「チュートリアル」「アジア概論」「アジア史」等の導入科目が成果をあげている。後者の課題を克服するためには、アジア地域言語上級や演習における研究指導に加えて、以下のような諸策を講じる。

現地語による授業：アジア各国の協定校から毎年教員を招聘して実施する。

現地語資料の活用：現地研修の引率や調査でアジア各国に赴いた教員が、社会・歴史・文化に関する基本文献と教材、ビデオ等を蒐集し、学生が図書館でそれを閲覧できるようにするとともに、演習で積極的に活用する。また、4年間のアジア地域研究の集大成である卒業論文作成において、現地語資料の活用と現地調査を奨励する。

基礎教材の開発：学部付設の現代アジア研究所の出版物において、地域研究とアジア言語を結びつけるような基礎教材を開発する。定期刊行物『ASIA 21』や『アジアのことば』といった書籍はその具体例。

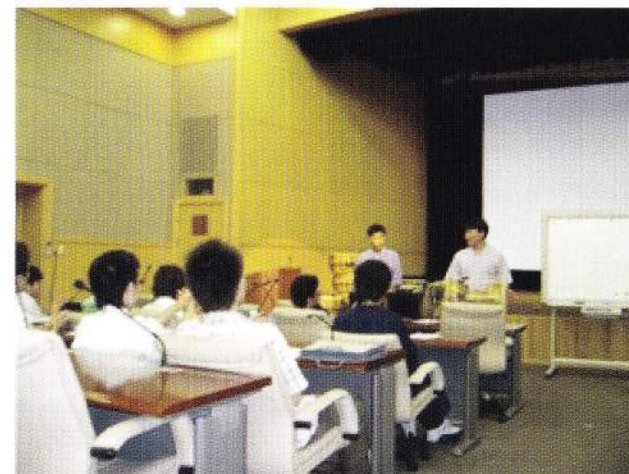


基礎教材「ASIA 21」

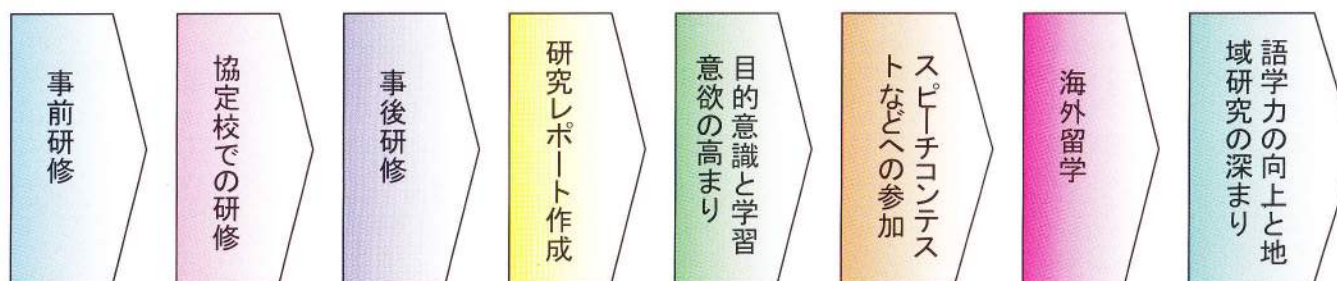
(3) 現地体験型学習

制度と目的

このプログラムは現地研修と短期・長期留学制度の2つの柱から成る。現地研修は、2年次生を対象に実施しているもので、アジア9カ国の協定校11校の協力で行なわれる。目的は、アジア地域言語の学習の成果を試すことで学習意欲をさらに高めるとともに、協定校での受講とさまざまな交流、研修旅行等を通じて当該地域への理解を深め、アジア地域研究への刺激とすることである。留学制度は、現地研修の次のステップとして、2年次以降の学生向けに設けられ、現地研修と同じ協定校が受け入れ先となっている。語学力に磨きをかけ、地域研究を深めることが目的である。



現地研修：韓国 高麗大学校 2006



実施状況と達成目標

協定校での研修は夏季休業期間から秋季にかけて、4週間前後、専任教員の引率で行なう。集中講義や研修旅行等のプログラムが組まれている。インドネシアはホームステイ、中国、韓国、ベトナム、イランは学生寮での宿泊、タイではチュラーロンコーン大学の学生チューターによる課外の個人指導等、現地での交流が活発に行なわれるように配慮されている。

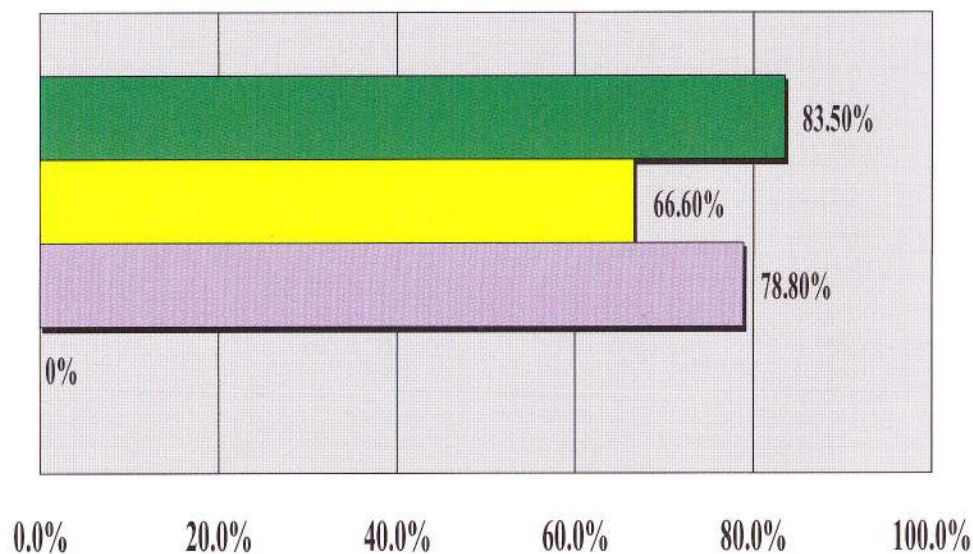
現地研修は通年科目で、事前研修・協定校での研修・事後研修の3段階から成る。事前研修では訪問国の歴史・社会・文化・日常生活等について十分な予備学習を行なう。事後研修では現地研修の成果を発展させ、レポート作成やプレゼンテーション等を通じて、アジア理解をさらに深める。語学研修の成果を「アジア言語スピーチコンテスト」につなげることも大きな目標の一つである。

海外留学は学部創設当初から行なわれてきたが、積極的に奨励するために、2000年度のカリキュラム改革で制度化した。留学講座をカリキュラムに組み込み、留学先の大学での修得単位を、短期(半年)で16単位、長期(1年)で30単位をそれぞれ上限として、卒業単位に振り替えることによって、4年間での卒業が可能になった。

実績と評価

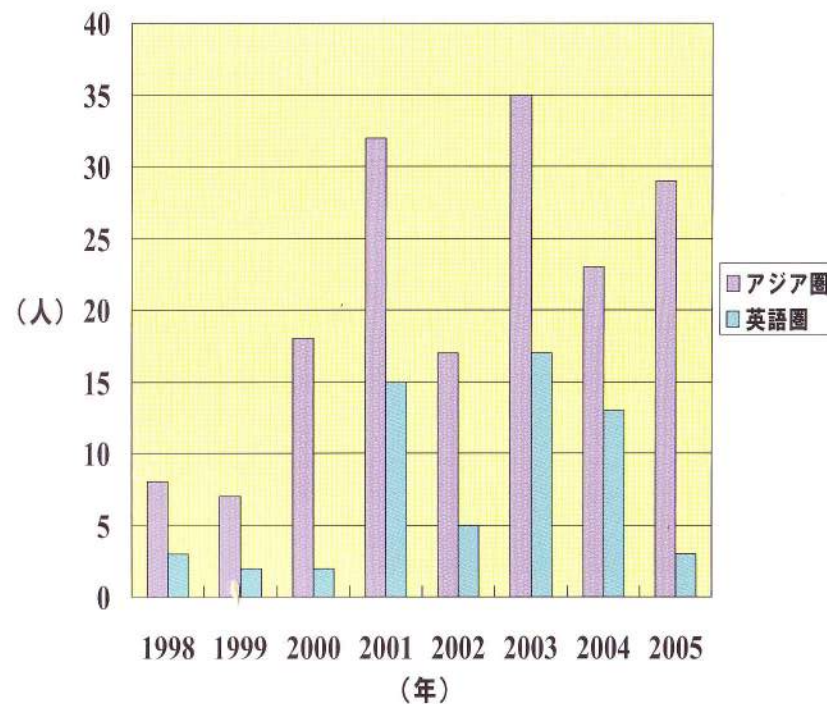
現地研修に参加した学生数は、学部が創設されて以来、**3,259名**（2005年度参加予定者を含む）にのぼる。研修後の学生は語学力においてもアジア理解の目的意識、学習意欲においても著しい変化が見られ、大きな成果をあげている。多くの学生にとってアジアへの関わり大きなターニングポイントになるのが現地研修である。海外留学も制度化してから、留学者数が大幅に増え、学生の刺激になっている。

資料：「現地研修に参加して何が変わったか」（複数回答可）
2004年度卒業時アンケート調査から



- アジアへの関心が深まった
- アジアへの意識が変化した
- 地域言語の学習意欲が高まった
- 何も変わらない

海外留学者数の推移（1998～2005年度）



アジア諸国の提携校と現地研修参加者数 1,918名(1996～2005年)



(注) 1996年～2005年度までの参加者数。
1996年以前は必修科目。2005年は参加予定数。
SARS・その他の影響により2003年の中国・インドネシアは中止。

課題と対策

現地研修に参加した学生にとって、アジアへの関わりの契機、現地体験で得た新鮮な感動、学習意欲の高まりをいかに継続発展させていくかが大きな課題である。これについては、現地研修から留学へというコースの奨励、アジア言語と地域研究を結びつける指導に加えて、次のような取組を実施している。

アジアからの留学生との積極的な交流: 留学生は地域言語の授業のチューター、スピーチコンテストに参加する学生の支援を、学生は留学生の日本語力向上への支援を行なう。また、留学生は日本人学生と同じ資格・条件で演習等の授業に参加するなど、日常的な交流が制度化されている。

近隣の市町村に在住するアジアの人びととの交流の推進: 東松山市、鳩山町など東松山キャンパスに隣接する地域に住むアジア系住民との交流を、「アジア芸能の夕べ」の開催、ASIA MIXへの招待等を通じてさらに深める。

キャリアガイダンス: アジアに事業展開する企業に講師派遣を依頼し、特殊講義「企業と雇用」で講習を行ない、卒業後の就職を見据えた目的意識化をはかる。



現地研修：エジプト アレキサンドリア大学 2006



現地研修：インドネシア バジャジャラン大学 2006

(4) 学生による企画・参加・実行型の活動

目的と取組

アジアへの主体的な関わりを促す課外活動は、本学部のすべての教員と学生を会員とする「地域研究学会」を中心に行なわれる。これは学生の地域研究活動を奨励するために、学部開設時につくられたもので、学生が入学時に納める学会費を基金として運営され、さらに事業によって大学から補助金が交付されている。各種事業の企画と実行の主体はあくまで学生である。年間を通じてさまざまな事業があり、なかでも「ASIA MIX」「アジア言語スピーチコンテスト」は学部の総力をあげて取り組む。

ASIA MIX: 5月末から6月中旬にかけて、アジア料理祭、映画祭、アジアの舞踊と音楽の上演、写真展等が行なわれる。この行事は、すでに19年の実績を有し、地域住民にも開かれている。その趣旨は「五感を通じてアジアをヴァーチャルに体験する」(学生パンフより)ことで、中心となるのは学生がアジア各地域の料理をつくり、模擬店で販売する料理祭である。2006年度は6月13日～15日に行なわれ、学生のコアスタッフ30名、料理班メンバー150名が地域言語に対応したアジア9地域の料理、約1,600皿を提供した。また、期間中にガムラン演奏、ベリーダンスの実演等が行なわれた。

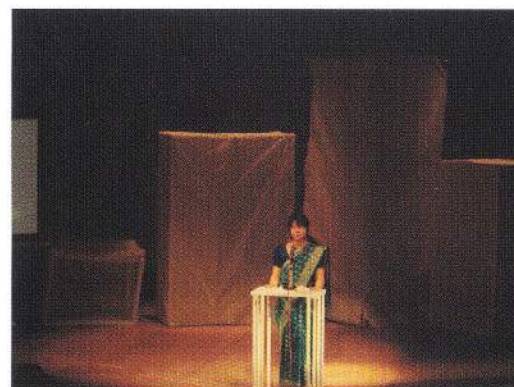


ASIA MIX アジア料理祭



ASIA MIX アジア料理祭

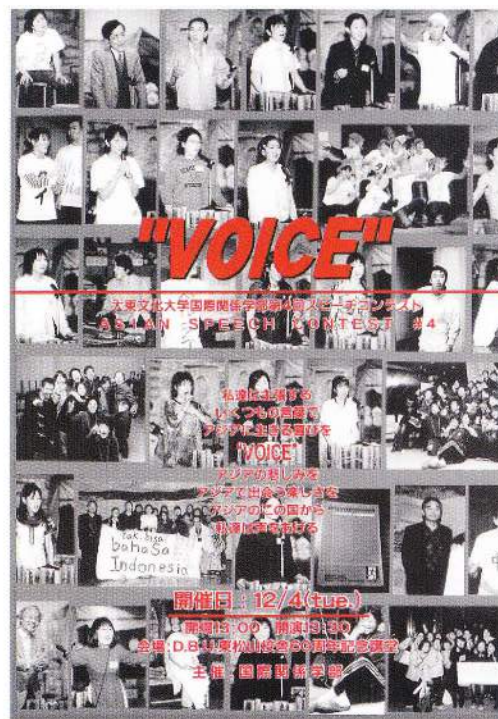
アジア言語スピーチコンテスト: 1998年から毎年秋に開かれ、今では「スピコン」の略称で本学部最大の行事として定着している。企画から実行まで学生主体で行なわれ、教員はアドバイザーの立場で参加する。第8回の2005年度は、11月29日、留学生の日本語を加えた10言語のコンテストに、予選を経た28名が出場し、300名の聴衆を前にさまざまなテーマで3分間のスピーチをした。出場者は、テーマの決定 → 原稿の作成 → 教員による添削 → 準完成稿の作成 → 暗誦と練習 → ネイティブ教員による指導 → 最終稿の完成 → 衣装の選定 → リハーサル、等の過程を経て本番に臨む。



アジア言語スピーチコンテスト



第3回ポスター 2000年



第4回ポスター 2001年



第8回ポスター 2005年

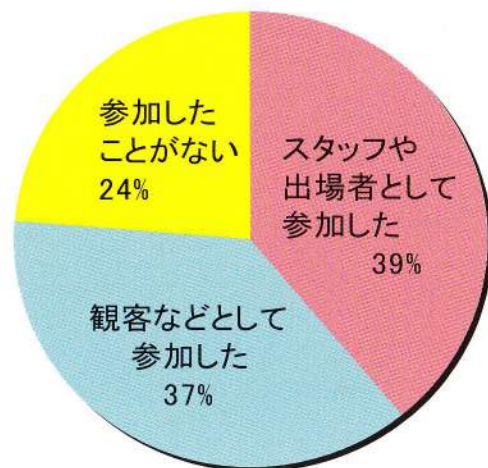
実績と評価

ASIA MIXの料理祭は、「食」というもっとも身近な文化を通じてアジアに触れ、食材や香辛料等を通してアジアを実感する。また、レシピの作成・買出し・調理・模擬店づくり等の作業を共同で行うことで、アジアという共通の場を軸にした一体感が生まれる。それは良き伝統となって上級生から下級生へ受け継がれ、とくに新入生のアジアへの関わりを促すという意味で、重要な導入教育の役割も果たしている。

アジア言語スピーチコンテストは、回を重ねるごとにレベルが上がり、とくに現地研修に参加した2年次生の健闘が目立つ。この取組でも、半年以上を費やす準備の過程で、プロモーションビデオの制作と学内外への宣伝、プログラムの作成、趣向を凝らした舞台づくり、クラスごとの応援チームの結成等に、多くの学生が参加する。出場者だけでなく、多くの学生が地域言語への学習意欲を高める機会となっており、本取組にとって欠かすことのできない活動である。

卒業時に毎年実施している満足度調査からも、ASIA MIXやスピーチコンテストにスタッフや出場者、また観客として参加したことが(75%を超える学生が何らかのかたちでこれらの活動に参加している)、学生たちの大きな刺激と高い満足度につながり、これらが本学部の教育と不可分の活動として定着していることが分かる。今後は、さらに学生たちの意識を学内から世界に向け、地域研究学会の活動が世界の現在とつながっていくよう促すことが課題となる。本学部には、例えば、ベトナムで「ストリートチルドレン」を支援するNGO活動を行っている卒業生や、スマトラ沖大地震で被災したインドネシア・アチェ地方の復興支援活動にボランティアとして参加している在学学生もおり、それらの活動を学生たちの刺激につなげていきたい。

「ASIA MIX やスピーチコンテストに参加したことがあるか」



第6回 スピーチコンテスト組織図

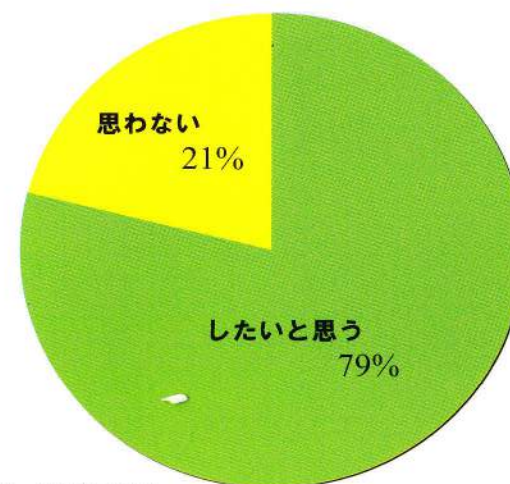
Ⅲ. 取組の組織性

実行組織：本取組は40名の専任教員全員が参加し、各取組は学部教授会の承認のもと、学部内に設置された組織が中心となって行なわれる。その主なものは次の通り。**教務委員会**：カリキュラム編成、履修状況の把握、基礎学力調査の実施等、教務全般を統括する。**国際交流委員会**：現地研修の実施、海外協定校との交渉等を行なう。**留学委員会**：学部留学生の派遣、海外からの留学生のケア等を行なう。**語学教育委員会**：アジア言語と英語の教育法や評価法等の設計を行なう。**現代アジア研究所**：教員による研究会、海外研究員の招聘、教材・資料等の編集と出版を行なう。**民族資料室**：アジアの民族衣装・楽器・調理道具等を蒐集展示し、授業教材として提供し、地域住民にも開放する。**地域研究学会**：「学生による企画・参加・実行型の活動」の中心となる組織で、教員と学生から構成される運営委員会が年間事業を企画する。これらの諸組織が推進する事業は毎月1回、教授会に報告され、全教員がその意義を共有する。

評価組織：学生による**授業評価委員会**・**FD研究会**を中心に行なう。授業評価は、年に2回実施し、それぞれ教員・授業ごとの分析を行なっている。FD研究会は教員による授業実践報告と外部講師を招いての研究会を組織している。

Ⅳ. 取組の有効性

学生の自己評価と意識の変化：卒業時に実施しているアンケート調査によれば、アジア地域への明確な目的意識を持たずに入学した学生の意識に、4年間の学習や課外活動等への参加を経て、明らかな変化が生じていることが分かる。こうした意識の変化がどのようなアジア理解に結実したかを示すのは卒業論文である。



「将来アジア地域で働いたり、地域言語を生かしてアジアに関する仕事がしたいか」

2004年度卒業時アンケート調査から

卒業論文学部長賞一覧(1998～2005年度)

アジア理解の深まりとしての卒業論文: 2005年度の卒業論文241点を、テーマや対象地域等から分析すれば、以下の4点が明らかになる。(i)アジアおよび日本を対象地域とする論文が約9割を占める。(ii)専攻する言語と地域に関わる論文の割合が高い。(iii)テーマが多岐にわたり、アクチュアルな課題、あるいは自分が実感の持てる課題を卒論に選んでいる。本学部では、1994年度から優れた卒業論文に学部長賞を授与してきたが、右の表は、過去8年間に学部長賞を受けた論文の題目一覧である。全学生が4年次の1年間をかけて取り組む卒業論文は、4年間の学部教育の有効性をはかるより確実な指標である。

学生による授業評価: 授業評価は、全学規模で行なわれるものとは別に、学部独自のものを2000年度から実施している。学生による5段階評価はいずれの年度でも高い数値を示してきたが、2005年度は学生による自由記述式の評価に改め、各授業に対する学生の評価を教員みずから分析し改善策を報告した。

アジアと関わる卒業生: 本学部の教育の目的は、研究者や政策決定者の養成を第一義とするものではない。アジアへの共感と低い目線をもって、みずからの工夫と努力で仕事や活動を開拓しうる人材を育成すること、それが我々のめざすものである。今後ますます拡大し多様化するアジア諸地域と日本の交流を支えるのは、まさにこうしたみずから考える現場人であろう。例えば、パキスタン・アフガニスタン、あるいはベトナムで活動するNGO事務局の専従スタッフ、留学生会館のアドバイザー、日本語教師、アジア言語教師、アジアを活動舞台とするプロ写真家、タイのTV制作会社のコーディネーター、アジア諸国の民芸品の輸入販売、アジアから来日する人びとを対象とする旅行会社、東ティモールの国連ボランティア等、「ホーム・カミングデー」の調査から明らかになった卒業生の職種と活動分野はまさに多種多彩である。このようにさまざまな分野でアジアと関わる多くの卒業生の存在は、本学部の教育が大きな成果をあげていることを示すものである。

| | |
|--------|---|
| 1998年度 | 朝鮮半島の分断: 信託統治構想をめぐって 台湾人アイデンティティの変容: 新台湾人の 形成過程 駅そばから見る日本経済 |
| 1999年度 | 孫乗熙と李容九: 愛国と売国の狭間で 現代中国の女性問題: 女性と社会・家庭を めぐって 観光のしかけ: 文化の演出とその背景 |
| 2000年度 | タイ農村におけるジェンダー意識の形成 中国のASEAN地域フォーラム加盟問題 Honda「Dream2」をめぐる人々: ベトナム人、 在外ベトナム人、日本人それぞれの25年 |
| 2001年度 | チベット問題の質的变化: 独立運動から 人権外交へ 同和問題における差別意識 タイにおける仏教教育と自己形成 |
| 2002年度 | 認可・無認可施設(保育所)の実態と問題 映画「アタック・ナンバー・ハーフ」にみるタイ社会 とカトウーイ 脱北者の人権問題と解決策に関する研究 |
| 2003年度 | チン・コン・ソンがうたった「故郷」の歌: ベトナム反戦音楽家像を超えて 埼玉県旧中川村における満州分村移民の歴史 湾岸戦争後のイラクの子どもたち: 経済制裁と劣化ウランがもたらしたもの |
| 2004年度 | 聖なる性差別 インドネシアのPembantu : 貧困問題を社会的格差から考える 東南アジアに進出する日本企業 |
| 2005年度 | 中国の清真寺: 34座のフィールドワークを基に 近代中国における民衆教育普及の原点 : 抗日根拠地で普及した「冬学」「民営小学」 「庄戸学」の実践研究 「ホラー」とは何か: 恐怖物語の歴史とその表現 ISO14001: 広がりの先に |

V. 今後の実施計画

もっとアジアへ、そして世界へ: 学生たちの意識と活動をさらにアジアへ、そして世界に広げるために、アジアを軸として近隣市町村との交流を推進する。そのため、隣接する鳩山町との地域連携事業「大豆のアジア学」を拡大発展させるとともに、近隣に在住するアジア系住民および留学生との恒常的な交流の場を設定し、学生たちのアジアへの関わりを深めていく。

アジア教育交流プログラムの推進: アジア各国の協定校から教員を招聘し、臨場感あふれる授業を行なってもらうことで、アジアへの問題意識と理解を深め、アジア言語能力をより一層向上させる。

言語テキストの作成と到達度指数の開発: 中国語からアラビア語までの9言語について、適切な語彙レベルを設定し、各クラスで共用できるオリジナル教材を開発することによって、アジア言語教育のより一層の組織化・効率化を図る。また、英検やTOEFLのような検定制度を持たない言語について、学生の語学力の到達度をはかる指数を開発する。

基礎教材の開発: アジア地域研究に関して、新たな基礎教材の開発、資料の収集と編纂を行なう。教材は学生の基礎教育に用いるほか、高校生向けのアジア理解教育に活用できる汎用性のある教材とする。

Daito Asian Communication Index (DACIX)の導入: 学生1人ひとりのアジアへの主体的な関わりを評価し、学習と諸活動の達成度をはかる指数を設計し導入する。現地研修と留学を含む現地体験、ASIA MIX、スピーチコンテストやその他の活動への参加、学外でのボランティア活動等を自己申告によるポイントとして、4年間を通じて学生の成長を示すことにより、学生が自信と達成感を得られるよう支援する。



地域連携事業「大豆のアジア学」